

成形圖說

五穀部

十六

			二二	和
		一五	五	書
		一七	四	門
三〇	一	四九	九	類
冊	架	函	號	

庫文閣内				
一九		二二		和
六		五		書
函		四		
一九	三〇	九		
架	冊	號	類	

内閣文庫		
番號	和	22549
冊數	30 (16)	
函號	196	101



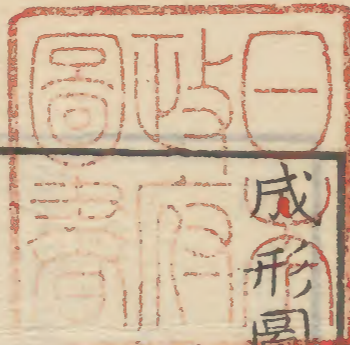
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak 2007 TM Kodak





成形圖說卷之十六

目錄

粳ウルミ子

稷モウ子

陸稻ハタケイ子

秈ソコメ

稻孫ヒツナイ子

糴オロキ子

附早中晚ソコ ナカラ オクテ

附塗餅ヌキヒ

成形圖說卷之十六

明治九年購求

成形圖說卷之十六

五穀部類

宇流志禰書紀○延喜式ハ米の一字と宇流志

宇流與禰按ハ禾と志禰といハ稻米の逆禰あり

真米志夜久乃米蓋字鏡ハ謂志良介米の訛也白と志

て紛詞あり

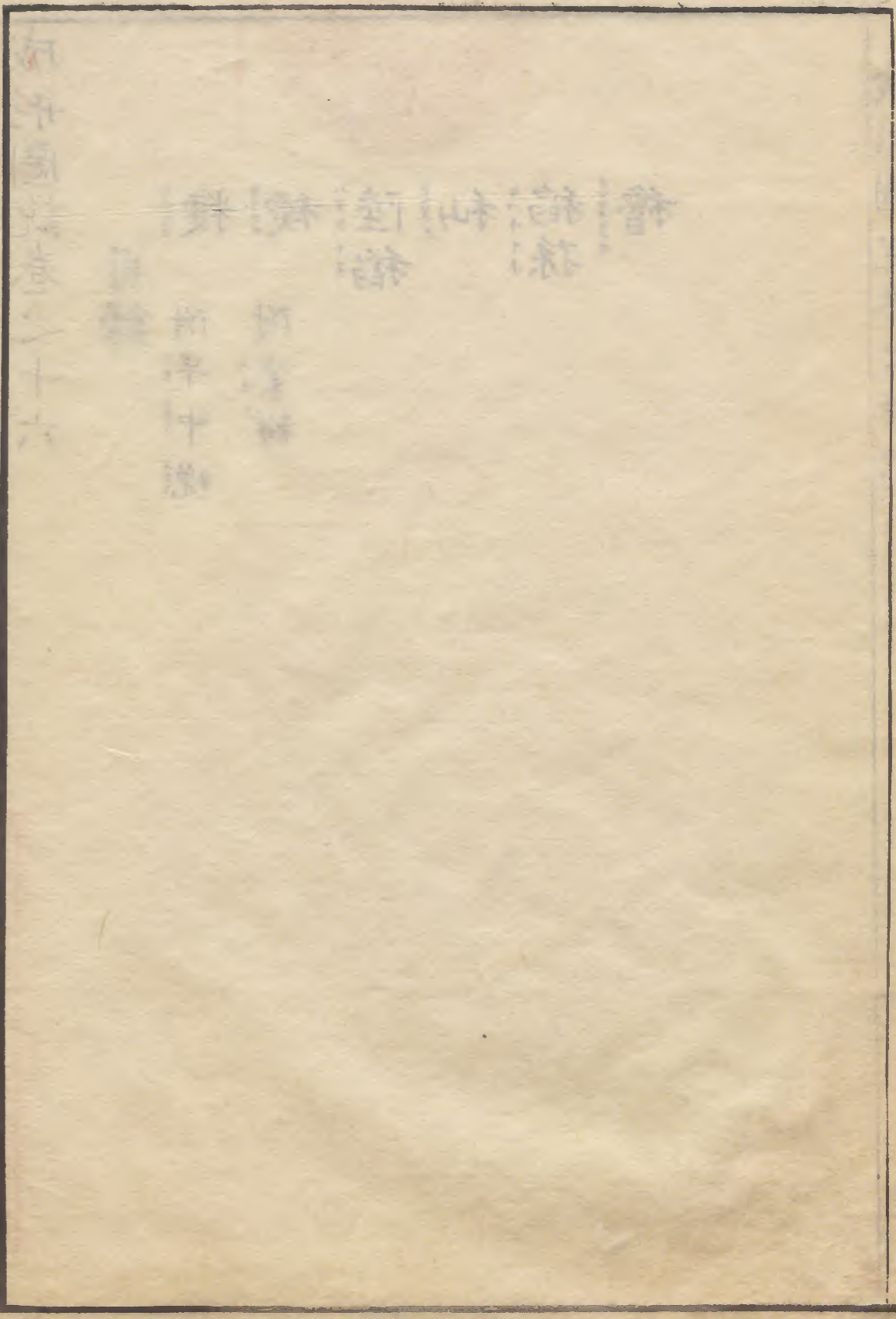
粳和名鈔引本州粳米一名粳米粳音じと

四民月令作粳稻○天工開物云稻種不黏者禾

紀稻曰秠米曰粳志うれと

蕃名レイスト

成形圖說卷之十六





うはと、獲あり延喜式に獲の字を書き且志祢八年稻
 の幼ツギもより年ハ穀ネコメの爲ありと対節の所なくとし
 くんえとて此との米の中あてと成りて獲ウルとの
 著イサヒシ者れバいつりて一光ツキ潤ツルあるとて各つく凡種凡種の春
 米コメと糯米糯米を較ヒキみるに種ハ稍光澤ありとて此とのハ即人の
 常ツネニ糧カシとし食ふ所の米ありとて早中晩の三種三種あり
 且夫和漢土地と異コトよし米性の美惡迥ハルはひとてかき
 とらひととて種タネ獲ウルの時節トキねたがもさばりてハ益トク普
 天乃同ツラシくも所あり但南ミナミ北キタ寒熱サムイに偏ヒナものは早晩日
 回マヒして遠トホくは況シやそ名品ナヒンなりとて一國の中一郷

の省ふして各地の俗用一定なく或ハ同種ありて數十
 名又其形状と相分毫厘の差違として又播種ハ時
 々流行するものと種れハその二四年は成実するしと
 て種易して地々ものなれハひり今種の穀と良莠
 の分るは故に徧く四方の俗稱と考ふる及各地日查
 究ておのほかろ知るものありし
字書又種又特種鳥稜
赤稷白稷と皆種名
 田令曰凡官
 田應役丁之處毎年宮内省預准米來年所種色目及町段
 多少依式料功申官支配
義解謂色目者種白黒
為色也種名為目也
 稻名の中
 えり最尚し其後の考に袖乃兒長日子穗多兒ふど

稻の名と詠ふあり今種諸物考ふる所種名亦多し○和
 名鈔引唐韻類青稻白米也實白稻とあり
糶或按風
作糶
 土記穰穀之紫莖種稻之有青穰米皆青白者也又表淮觀
 殊俗云河内青稻新成白稷と淵鑑類函に身々あり
 和世萬葉集歌よとめらよ紗衣の速稲と刈るに
 稻あり下徳國葛城郡の中ニ五里とありありは地
 早稲東國第一の早熟とあり一説ニ秋の初いとあり
 く熟ぬきはると秋の初いとあり一説ニ秋の初いとあり
 魚子稻の子稻ハよりわきめてさきものなれハのく名
 あり早手の新といあり
早代匠材集○志呂
 早稷 本艸○時珍云六
早稻幾暇格物論○聞書
 早禾
 農書 穆稻 農政全書 檀田淺
 書 穆稻 侵處宜種 黃穆稻
 成形圖說卷之十六
 四

蕃名 フルーグレイピゲレイスト

和ハ早あり波と和と通つるを按ツカサハ若ツカサ稲ハ若ツカサ稲あり若
苗ありといふおもひ合ふべし稲と約ツカサは世とわら故又
和世と称ツカサつり早稲ハ若年ツカサとして中稲ハ中年ツカサあり晚
稲ハ老成オトナキキがふとし凡ツカサる葉ハ早稲田早穂ツカサの多きと
ゆゑ事記傳曰和依ツカサといふ称稲ハ根を深ツカサくして和世と
下に連ぬ言ツカサとすといふあり又万葉に葛飾早稲と
あるは下總國葛飾郡とて地を稲とてててててて新嘗ニハ
祭ツカサといふは奇の中ツカサはふといふといふといふといふこの人
ハ内ツカサはこれとててててててててててててててててててて

嘗ツカサといふと漢ツカサの使ツカサはふといふはるしといふ此故事成語
よし袖中抄ツカサも載ツカサり神樂歌ハ早稲田ツカサの名あり今名字
田ツカサと書ツカサ又源大府卿集ツカサもいふといふし早稲と書ツカサり
まじりありしはあの花とててててててててててててててて
さうとてててててててててててててててててててててて
のあり田ツカサうちありといふげは代ハしられといふといふ一
説ハ播磨の家といふ所の稲とてててててててててててて
河ツカサ副ツカサといふは子編の中ツカサとててててててててててて
といふといふ雪と葉ツカサに引ツカサとてててててててててててて
いそくあハ早稲とてててててててててててててててててて

福よあまを初夏にして秋令を仍ふなり
 今一節早稲とらふもの元子しせつ稗ミカハ茎サカ一節出まは
 即ち成るる月キキなほぬきやりぬよ一節ツクの種ツクとるん
 食し又根子福とらふものは根サウラハナ花ハナ開くは次は根サウラハナ
 伊勢早稲 尾張早稲シマ 肥前シマ早稲シマ 五島シマ早稲シマ
シマ 白シマ ぬき子福ハ早稲とゆふよ上ふよりシマハ其始種
 と波せし本土乃名と守ふる年又越中子福あり是之北
 國の種なり 房前 刈草 熊谷 袖兒 緑葉 荒芭
 湯田 笑樂 吾待受 葉隠 網子 芭葉 小穂量
 楊柳 根乳 葉溜 大早稲 ぬきの名々くさるし切

し子福ハ種子を篩ふるより廿日めよぬに浸て廿日とる
 て丸カケにムシロ十日めよ乾しよいよりぬんの湯と侵の上よ
 重灌カケ送ムシロふとぬい芽と出しくシマは二月彼岸啟前熱前
 播て四月初旬ハ皆秧と拔起て分載より七月中旬ハ
 獲収むけよの粒少くは為し蓋福はまシマとシマハ堅
 好ヨカくシマ子福ハ澄み初ハナにナレは成よぬぬ実つら者より
 我藩の南島雪時と霜墮オチるぬぬ人定よ種播て五月よ
 ハ浅熟ぬ是斯方の子福と似るぬ又ゆきナハキナクもシマ弱シマ
 肥前よ類わり天工用物所謂其冬季播種仲夏即收者
 則廣南之地無霜雪故也とらるるがふとし然とも衿陽雜

へおろし土と反はみと耕遍して春月揚戸嫩葉と芽と
 候て石菖等とぬれく菘とす一月中種と播て栽
 入るりも耐老農田畝を附割て秋と播は者に播りて
 多穀類一二本と一科とし二尺四寸間許を根深く土
 よ入さるやうに植るよりかく稀疏を以るゆゑ苗根子
 日あつてもよく立滋茂やうく一科よると二斗飯蓋もも殖
 ら地又鋤耘と初のころとすよの葉よまよと実よまよと
 田地へおろしかくして七月ハ既一刈九ゆゑ田戸糶成
 おしてそのれと濁り又曰す田租は段よりす糶米一斛
 ハ斗又藍苗等の年税あり梅より一科一二本はくあし

て蒜の間の穉あつともハ代を播まりまらゆゑふ
 崔寔四民月令云三月可種粳
 稲美田欲稀薄田欲稠即是耳
 ときのみまらぬ臭氣あつとものは米穀狼戾して
 收穫より磨ひよむもて鹵莽ふるがゆゑあつとも物障奥
 土肥等の玉ハ土地潤く厚うゆゑも初より田地に肥養
 と施し及以山形等の田ハ子種と栽るのあつても中へ
 入るて川泥と拌りの濁泥と田へ澆めて一度のころと
 再糞を用うるよりと澆り又秋田頃の子播米ハ浪華
 に致して秋の彼岸後より子造乃酒不釀やり俗よ之と
 何ぞい造と云農業全書曰早稲ハ苗代よおくより十日

饗葛 サシ 稗米 近江兒 サシ 皆白 嗟越 サシ 赤く稗 白

荻毛 サシ 赤荻毛 サシ 黒稲 サシ 皆白 サシ 深 サシ 白 サシ 大

黒米 サシ 烏稲 サシ 黒稲 サシ 皆白 サシ 皆白 サシ 皆白 サシ 皆白

京白 飯桿 負荷田 毛實 一節 絹買 百倍

子實一倍 荻無 庭溜 冷毛 砂子 青鰕 黃治

赤黄 サシ 赤毛稲 サシ 赤毛稲 サシ 赤毛稲 サシ 赤毛稲 サシ 赤毛稲

のり サシ 形状較差 サシ のり サシ 形状較差 サシ のり サシ 形状較差

奥手 サシ 百葉集 サシ 祝詞式 サシ 奥津御年 サシ 奥津御年 サシ 奥津御年

於志禰 サシ 和字正 サシ 濫釵歌 サシ 濫釵歌 サシ 濫釵歌 サシ 濫釵歌

稲田床 サシ 地 サシ 奥平 サシ 奥平 サシ 奥平 サシ 奥平 サシ 奥平

晚稻 サシ 獨以 サシ 晚稻 サシ 為種 サシ 為種 サシ 為種 サシ 為種

の サシ 名 サシ 奥年 サシ 奥年 サシ 奥年 サシ 奥年 サシ 奥年

東壁 サシ 專以 サシ 穠 サシ 為種 サシ 為種 サシ 為種 サシ 為種

之 サシ 注 サシ 乎 サシ 晚 サシ 稻 サシ 未 サシ 必 サシ 盡 サシ 是 サシ 穠 サシ 也

穠 サシ 内 サシ 則 サシ 註 サシ 音 サシ 醱 サシ 熟 サシ 而 サシ 獲 サシ 之 サシ 曰 サシ 穠 サシ 正 サシ 字 サシ 通 サシ 云 サシ 即 サシ 今 サシ 晚 サシ 稻

晩米 サシ 本 サシ 艸 サシ 説 サシ 文 サシ 説 サシ 文 サシ 説 サシ 文

蕃名 サシ ラート サシ レイ サシ ビ サシ ゲ サシ レ サシ イ サシ ス サシ ト

奥手 サシ ハ サシ 即 サシ 奥 サシ 年 サシ 奥 サシ 年 サシ 奥 サシ 年 サシ 奥 サシ 年

ハ葉よいつるがおと穀の各ふれハ粒晚禾とあるよ
 りしどはちるは異ふは晩の義とのを解は手
 小何ふるわちとあるはうり

その種うはハ中稲とおれし所謂先種後熟あり四月
 中旬よりして小苗とすお月六月までと極るにせり
 十月十一月よりありわくして刈とすし又片山里の溪
 田あるよハ十二月刈あつわはるのわりかくはるよハ
 毛込も硬く猪糞あとの種つなすはるものよは
 りを藩よては赤葉よとつものよ上等とやると赤
 く稈江く面白し此作 白京 又青白 楊兒 海馬毛

- 鰻子 大堂 石堂 大實 延赤小實 白糶 石子
- 小節 双無 小盐 蔓 霜破 白笑 四十床 反 佐安
- 香寄 十節 十節十節よむ 音不 音不よむ の俗稱わ

晚稲田ハ刈種て露やげよふりあとしくえゆめ
 がけさぬよはるるふりよハ人の用めといはれて地
 懶とつ甲斐あぐぞぬよよ玉苗のせりて田曲
 のまるとちれいふを眺はふくつたよよし枯る
 稲のおとあれいふハ種新あつるよとく秋のもの
 びしよもふもりいふよ地す時よはるる

云地土高下燥溼不同而同於生物生物之性雖同而所生
之物有宜有不宜爲土性雖有宜不宜人力亦有至不至人
力之至亦或可以回天况地乎宋太宗詔江南之民種諸穀
江北之民種秔稻真宗取占城稻種散諸民間是亦大易裁
成輔相以左右民之一事今世江南之民皆雜時諸穀江北
民亦兼種秔稻昔之秔稻惟秋一收今又有早禾爲二帝之
功利及民遠矣と云る是實も今日の急を越いつ所の利
と資の所とらつても凡土宜者天地の習おのり
南山の突あわれハいづれと人力を令しつりとも終
ハ回天の術と技一かとし物といふ高爾は就ハ重遠ハ

そ成迂濶うて志行さざりとも何り迄そ文祿の頃始
て甘藷カライモと蕃船エに獲りてより西南の地ハ山野肥磽と
あく播殖ウエフヤして百餘年今日の急を越ふりの急なる
るハふしきるまでと糯米のそと羸羨ヨチイあるハ何事ぞ甘
藷のたよりハ其種トリウモ播ウエせよ易簡ヒヤスクして水田の作ナシギつ、
且早潦風虫ヒナリアメカセカシを思ふの患キツカヒあるゆゑ稲イナ種コメの耕ツリカクハ大やう
にありねるる所とあせぬし又稲ハ不熟マタクとも當年ハ
甘藷土デキはるる一方よりのありあつともあるべ
し凡むり甘藷の穀ありそを種タネむるると何れも
よそ交ハ乃そのおまくなる種タネかば終ツキよ終ツキて死シを

ありのあき新とるあんとのど一方よりれハ一方の
 しはふしひるれは漢籍清とは佛書とつらつと瘡疹いんざん
 づ侍深ソニウツり井落カライモとて烟葉タバコとあり下痢ゲリまでつる入て此
 によしと喜ヨロコビは彼カレよハあアととト萌モる勿為禍先勿
 為福始夫禍先誠不可為矣福始亦不可為と此の徳あり
 只何事とむり一海よりよまハ何はまじ宋太宗真宗あ
 との占城チヤンシヤウ福は獲エる一と利氏の第一とてはもとそ地の
 さましきよよて凡稷稻ソウリの春秋と度て滋登イデキゆる是レ此
 方水土無ナシのたよとて乾中イックア晚播オクアちど宜ヨクく味アジとれ
 ちるハあし我の沖繩オキナワハ大寒オホサムイと種撒タネキて四五イハ月ハと和獲カキ

収カキむまよりの斯方カへ漱カき海ウミ島シマハ六月ムツキよ獲カキるりまより
 まより部方オホカタ一ちり子コ黄ワウ板イタ島シマハ七八シチハチ月ツキよかりとふ道ミチよ部
 方オホカタへりてハ十月ジュウグツの末ノヘよも川カハとほ色イロく此其ココ氣キ候トキのササ前マエ
 凌オシるカ空ソラ約オホカタ一月イツキをシくレね差サどかし天地ツチノチのササ暁アカツキ乃ナ第ダイ
 て地物ツチモノと相無アヒツレルむハちづまチよシ物モノされハ其水土ミツツチにかあを
 ざらものはいりちど人カとせるとも性ハカレヨリ感カン備ビて
 約オホカタ量リヤウと少オホカタは理リありと向ムカむ月ツキよ川カハをシは南ミナミ島シマの福フクハと
 ともりの此方オホカタよと子コ播ハクハ皆ハ脆ハク鬆ソウて味アジ清スくシあアぐグ西
 土蕃地ツチハタチの福米フクメのぶとしはまじ耕作コウサクハも生ナマ河節カノフシと遣ツへ
 ぞ天性テンセイよ吹フクのシ成ナリとあアらラハ時トキ高タカ新シンと安ヤスまマとト

去て一足と我地よあ〜どと農業は勤るに外なし名に
 以味よ〜ふれ利巧と知つては却て徳と失ふと多し
 元耶律楚材每言興一利不若除一害生一事不若減一事
 と此の謂あり

餅米 モチコメ
字新鏡

餅乃米 和名

毛知志福餅 餅福

稷 音悞俗作糯糯 ○和名鈔引蒼頡篇糯米

稌 音徒爾雅 ○廣韻稌

稻也詩豐年多稌天工開物稻種粘者米曰糯
 開物稻種粘者米曰稌 林稻呂氏春秋晉書陶淵明為
 子固請種粳乃使一百五十畝種林稻五十畝種粳
 内則云菽麥黃稻黍梁秫惟所欲也者以稻與秫稱秫為糯



林稻 モリイナ

法橋洞龍美清筆

稻為梗梗即杭洲明種林以取酒
是也有此確證可以正本艸之誤
大師古紀

蕃名クレーイスト

毛知とハ粘氣有りて物に附着すの粘り
張りのハ引強が粘も亦おれし天工用物
たさよりなり

又保食ともいふ食亦毛知とつひしと云

今村名餅田飯

凡糯亦早中晩の種あり多く中晩の二種あり糯ハ軟

山て粒大あり西州より早糯とつひは七月比熱む餅

又保食ともいふ食亦毛知とつひしと云

尾張あり

米長しく白糯く微米白し赤

此他五十餘種の名呂そあ

て而糯ハ多込ふし大畧
微あり 蝦腹 近江子 粳米皆 膳 深墨の湯 笠糯 粳米皆
白毛 粳米 紅米白し 粳淡 御傘 粳米共 綿白 粳米
共白し 松越 之糯 粒細く色米の形又似たり 餅 綿白 粳米

岩摩 葉稀 饗蔓 鶉鳥 古凡禮 擇穂 谷渡

落不待 岩越 頸長 身陰 疏稀 袋毛 漆稻

泥田 坪瀬 重累 糯米は農夫の利あり

といつとも虫つさやよく又粘糸の属好むもの多

れハ多く作りざし赤石候米倉上めて風味佳し餅

作りて脚つよしといふ

成形成説卷之十六

十七

延喜乃御宇近江國より大嘗會に供御ありし時

はふみ
乃屋
かぐみ
の山
法とめ
たれ
はうぬ
てそ
尺ゆり君り子と掛け



大伴黒主

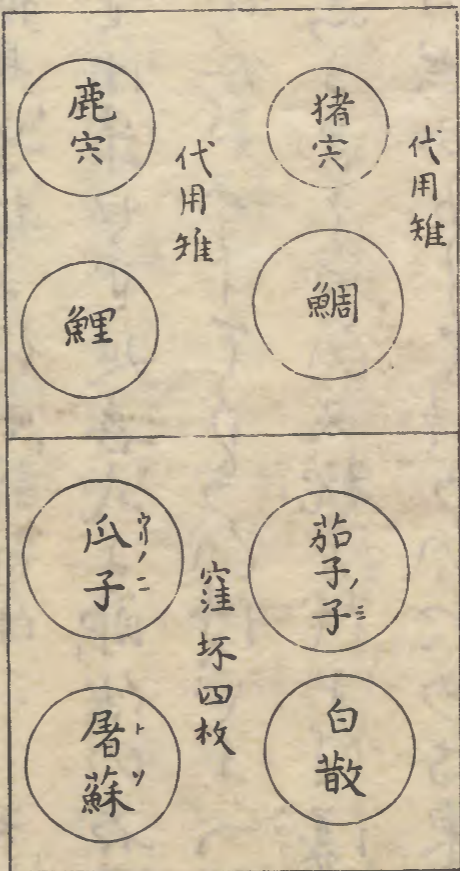
糯米ハ昔祖神ノ薦享ノ樂威ニ供給あり字鏡順鈔等ニ
餅ノ一字もて毛知此と訓也又職人歌合もえりて世
は秋の田乃西の穠もちのねまにいつる山の端の月
今毛知とのこつハ畧りる也禮内則註ニ餐稻餅也炊
米擣之以豆為粉糝餐上也爾雅翼云合蒸則曰餅餅之則
以為表餌言夫正月元旦の禮節ハ神武天皇の御宇ニ
始め行はしむ本紀にもえりてて歳首ノ餅と製て鏡
餅と稱ふおとよ日神磐戸よありてせおもては時
其御象鏡ニ鑄まりて祈りけるも再ハ磐戸の磐石いと
い佳例よゆりて新玉の年三返り春の初はりの常時

類聚雜要鈔

供御脇御齒固六本立

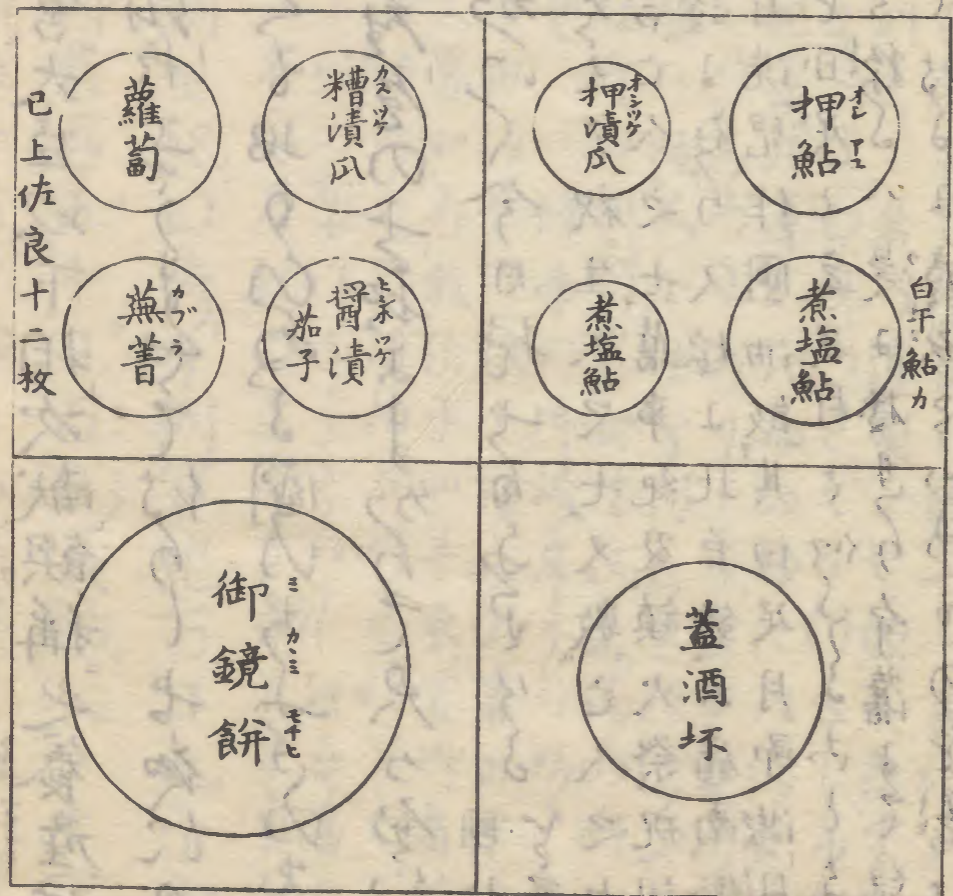
三箇日同前也
御莖盤所供之

近代鯉雉鯛鱸如此盛之



料 但不入自内膳司者

料 但不入自内膳司者



置鏡餅上物

讓^{ナゲ}葉^ハ一枚羅^{カボチャ}蔔^子一株

押鮎一隻三成橘一

枚但近代一

御鏡餅三枚日別自

藏人所出納渡之

此佗の用度餅子預

ガハ省あり

忌言とせり日次紀曰具足餅特忌以刀截之故以手缺之
 或槌破之是謂鏡開又缺餅之名自此起ヒリコロヒ鏡餅の本ハ凡軍
 陳の糧ハ糯米と最上とク糯米カシイヒ餅を焼きて少く食
 いたるとよく飽きず遠トホキは齋セウラスもも重なるもあつと餅を焼く
 ふしころば臨時に煨燻アケヤケバ即食ゆ食し又片餅強餅ツバなど
 つもものときふし餅を焼くあり○坊日正月とい
 ふとハ今も歳内法因祝賀の節とし小豆餅或ハ小豆
 湯飯ツクとくものついでふとあり
拾遺記云江東謂正月廿日為天穿日用紅縷
繫餅置屋上謂之補天穿○歲時記ハ補天餅と云え秘笈も此事あり
 儀式帳曰三月三日新草餅作奉二所 大神宮供奉御饌

殿文德實録嘉祥三年訛言曰今茲三日不可造餅以無
 母子也母子ハ今呼ぶと這兒コノの如くその女児メノ自身を以
 這コノ四コノを糸コノと遊コノと名く艾餅ヨモギモチとて節物セツモノと成ナリ蓋フタし
 ハ新アタラしき鼠麴草ハハコの餅モチ也ナリと後ノチ又マタの餅モチとありし
 も也拾遺集三月三日にきくありし之夜乃ちちくつと
 ていざしりるもよめも藤魚フジイサ宜方ヨシカタ三月の夜の餅ハくは
 し炊ツクしゆは淀イソ餅モチはくは揚ツム餅モチ也ナリ是コノ高タカ村ムラハ昔ムカシはくは
 採ツマ用ヨウのしシ也ナリはハ按マタ朝鮮賦チヨウセン註チュウ云クニ三月三日取ツク嫩ニ艾イ
葉ハ雜ハ糝ハ米ハ粉ハ蒸ハ為ハ糕ハ謂ハ之ハ艾ハ糕ハ彼ハ我ハ
の風ハも嫩ハしハ我ハ彼ハ 節遊セツユの俗ハ開ヒ化カ紀キハ比賣ヒメ那素ナソ寐ミ殊ツ
 とつとありてその比々ヒヒ奈遊ナユ也ナリといはくは風

よきくつららしく老^{オヒ}あまらんばる貴女房の飾あど
よのせんはいとくさあまし唯^{ハコ}遠^{ハコ}見ハ小く細く膳^{シヤモリ}巻ハ
草^{クサ}穂^ホきん^キのそ三日の夜と清^{キヨ}ら^ラは潔^{イサキ}めぐる水の^{トコ}その
明^{アケ}もつらくゆくゆくは^ハな^ハくや孔子と暮春浴乎沂^ニ風乎
舞雩^ニ乎^ハ吹^ハさら^レハ其^ハ量^ノの一事^ニか^ハつ^テあ^ラざ^ルや^ハ
え^ハあり^キ○^{カシハニキ}榊餅ハ五月五日ハ^{カシハノハ}榊葉^トを^ニ染^セて^ツこ^ト葱^ニ
て^{チニキ}粽^トし^セ祭^グ供^ノの^トと^トい^フ一^ハ供^ヲ御^トと^ハ加^ハ志^波
と^ハり^ハる^レ珠^ハと^ハ葉^ノの^ハ香^トを^ハか^ハげ^ハく^ハ折^ハあ^ラれ^テ
揚^ノの^ハむ^ハり^ハ高^キの^ハふ^ハま^ハ代^ノの^ハあ^ハり^ハけ^ハさ^ハら^ハん^ハと^ハ
い^ハづ^メて^ハし^ハ上^ハ方^ハハ^ハ端^ハあ^ラる^ハと^ハ東^ノの^ハ方^ハハ^ハ端^ハは

必^{コシ}この^ハもの^ハの^ハ整^ラく^ハら^ハふ^ハい^ハづ^メて^ハあ^ラり^ハの^ハ茅^ノ卷^ハ
後の^ハ俗^ノも^ハも^ハ魚^ノし^ハ江^ノ戸^ノ沙^ノ子^ノの^ハり^ハつ^テ葉^ノ我^ノ
淡^ハ曰^ク嘉^ノ祥^ノの^ハ御^ノ祝^ハハ^ハ奈^ノ良^ノの^ハ帝^ノの^ハ大^ノ同^ノの^ハ祝^ハあ^ハい^ハづ^メり^ハ年^ノ
あ^ハり^ハ又^ハハ^ハ隔^ハ年^ハよ^ハあ^ハら^ハぬ^ハ陽^ノ氣^ハを^ハあ^ハる^ハく^ハ人^ノの^ハ鬼^ハ
ま^ハじ^ハむ^ハら^ハり^ハ思^ハお^ハう^ハカ^ハ名^ノ少^ノ彦^ノ名^ノ園^ノ韓^ノ神^ノハ^ハ疫^ノ魔^ノと^ハつ
ら^ハざ^ハら^ハせ^ハま^ハく^ハハ^ハそ^ハよ^ハ清^ノ酒^ハを^ハあ^ハら^ハせ^ハと^ハも^ハの^ハあ^ハら^ハり^ハ
あ^ハい^ハき^ハあ^ハら^ハひ^ハて^ハ天^ノ長^ノ地^ノ久^シ民^ノ安^シ樂^シと^ハ清^ノて^ハあ^ハら^ハり^ハ
あ^ハら^ハり^ハよ^ハ仁^ノ明^ノ天^ノ皇^ノの^ハ承^ノ和^ノ十^ノ四^ノ年^ノの^ハ次^ノ二^ノ神^ノの^ハ清^ノつ
あ^ハら^ハり^ハて^ハ六^ノ月^ノ十^ノ六^ノ日^ノハ^ハえ^ハや^ハこ^ハま^ハち^ハひ^ハ人^ノの^ハ肌^ノ膚^ハよ^ハ
て^ハ思^ハお^ハう^ハし^ハ十^ノ六^ノ日^ノの^ハ敷^ハよ^ハあ^ハら^ハり^ハて^ハ餅^ハ十^ハ六^ハ日^ノ成^ハハ^ハ



の月の数もつるふよハ十三りみてめてさくあはれし
 ままていみしまりのふれごととおこるいさよし結
 る掌中曆よ亥子の餅七種の粉と合て作る七種の粉ハ
 大小豆豆豆豆胡麻胡麻栗栗糖糖ありせ漬問答よ十月上旬の亥日
 の餅の事ハ内蔵意よりもはそ感懐の程嚴重ありより
 せんてうとつふくくあり是今の十月亥猪の俗節とん
 んらり○三夜餅三ヨハノモチハ中右記寛治五年十一月二日女御入
 内之後有三夜餅事件餅民部卿所被調進也是高年之人
 所役者主上入御帳之後関白殿取之令進○季子餅イトコノモチハ臘
 月朔日の朝アサに食ふイハヒ餅イハヒなり故よ此の朝と餅イハヒ月イハヒ立イハヒとい

ふ又川カハのハ餅モチもどモチり○枕冊子にくぐさこのひら
 きともちいふと物よ取れてといふひらきともちい若
 々ののハ餅モチとつふモチたモチ也と注せり○柿餅カキモチハ白柿シロカキと
 眷て餅とふとあり瀬朝樂事云正月朔日簽又片餅堅餅
 凍餅シニモチふどつふ多し又赤豆と擦スて煮ヌる餅とせんさい
 餅とつふハ善哉餅ゼンサイモチとて長崎唐人ヤシキヤ彼ヤシキヤハ省板と出して
 賣賣と梅村載筆ウツリ神在餅カミナリモチと書カキべきよしいうハあふ
 了○或人曰七月中元靈祭タマシコのハ餅モチと徒タラシハ海川ウミノカハよ流し捨スハ
 せんふしとつぐくは路頭ミチノヘの乞西モシ又興キヨクへうウツんハと
 信の施シ餓鬼ウツリあウツんハがし

陸稻



白田稻

野稻

岡稻

早稻

岡穗

陸稻六書故○淵鑑類函稻性宜水亦有同類而陸種者謂六月至九月獲北早稻齊民要術早占農書占城禾國朝方地寒十月乃獲

黑穀米

格物

占稻

本州

雷稻

西事

尖米

黃山

以上

類藁梅子綱目子占城稻とつとつと稲の一名とつとつと農書及爾雅翼字と考つとつと稲と占米ハ本自あるととるえ

蕃名

アケケルイスナ

岡稻

ハじり

皇孫瓊々杵尊襲の高千穂峯へ天降玉

ひし時深霧にがたへし暎蒙一、枝稻穂ととてお撒り

しつは忽に開明なる系と成り給きりしより高千穂峯
の谷ハ出ルイテキ今其地は陸福多くけりふといふ
ふと日向風土記に載り又その峯は雲霧常におひ
りるお霧島嶽と云ふなりや此高千穂峯てふ者今の霧
りるは日向國曰杵郡高千穂山にありて云ふ
日と日向國郡を築き割られし後そより大むりし
地面とおの胸に割りておし量るふと夫古事記に高
千穂之久士布流多氣と云ふし書紀にハ襲之高千穂峯
一よハ漆之峯とも亦穂日とも穂觸とも云ふなり久士
布流ハ穂日引く言ひて日向の旧名と豊久士比
別とある久士比より出たり又具高千穂とハ皇孫乃
皇宮所の名ありて今の京平安城よりせし山嶽の根と
そ北域の左右とハふへて高千穂とせし山嶽の根と
のこまづぐと云ふはさしてそ國といひしきほの大
隅の係て桓武紀に霧島の事と贈於郡曾乃峯と云ふ
て古の添之峯高千穂峯久士布流多氣ふとハ昔今の

霧島嶽ふを考へよ又此東峯に神代靈牙一枚と存
體也今山上に植ハ折しと禁よ崇て新嶽権現社と云
大乃己隆出は然と天明初池田某者撰て傍に立り
此と除去し事ハ正きこ成通證に吾先族の事と譯し
西遊記に此偽牙尚在よし著せふ球之亦訛傳と附記
皇孫西州子條條て邊疆を理め而姓と安しむ福植と
お撤むふと云ふハ此其子耕種を教導すむいしよし
おて々も種うるわざお撤さけふと云ふしよそ
而始て天津陰日御蔭とけ作よまらそと云ふく蒙
し朝涼亭夕深霧と云へ忽に昇る信て恰と青霄と云ふ
うたつと王澤と被りけりかくはりけりしよわさてお撤

裁られしハ陸稲ヲカシマありてその昔もむすまで霧島ノ地ハ
 ハ歳々種々といふごとくして自生此陸稲多しといふ事あり
 紀中此文も志略し且はその地ノ民相傳へて生種とし
 と霧島稲の名を存しるるハ少縁ある事あるがうし
 今もむすまで西州の農夫ハ稲の初穂をみて必霧島神
 廟ヲ献々俗の恒々としむると所由あると云ふべし此
 吾邦の陸稲はよありされし始むるを按ず西土のハ
 ありハ皆陸稲なるも木州時珍云古者惟下種成畦故
 祭祀謂稲為嘉蔬此陸稲の證なり夫下種ハ成畦といれ
 ハ泥淖の中ハ畦ともいふことありて是く又詩

周頌ハ豐年多秣ニシテチといふと秣ハ稻利下濕と云わば稲ハ
 してハ下濕といふことありていしハ水田の
 稲といふことあり

此ものハ形状全く水稲に似たりは早晩赤白及糯の種
 類各ありたりハハ十八夜の前は撒て八月中旬ハ
 ハ取とのま霧島野稲ハ稗糯クニシモチせよあり
 糶カシは長く稗米カシせよありハ種ハむり
 釜火いしき山ハおろしありハ木村志とて後ハ其家
 小ありたりしより此目ありとて御寶子ミタカラゴ米白し
 鮮百合シラカ長しと出 黒糯クロコは長く稗米カシ此ハ
 飯ヒ 西節フツレ 日下ヒタカ 萩子ハギコ 春野ハルノの種多し
 野之ノの種タカ 乾カシ

赤米

眠寤集子阿伎米とつつの此種と河也こげ高米ふ
るべし今俗み大冬米といつど種ハふの一種あり
○赤米ハとち南島の土産て炎徴の地ニ生
産るぬのハち包多くハ赤紅ありと天然ありき
直安和字彙蓋結ふきと赤物登凡志此の穀乃下
ハ之きとぬ食て仇也之きの後稜也新撰字鏡ハ
餉の字と登毛々々志と訓一説田子とと此ハ手拵ハ
少ととえれと後
の俗意ありべし

私音仙或作私粘粘○爾雅翼一種曰粘比於稷米小而尤
為粘○本艸時珍云粘亦稷屬之先熟而鮮 菊花粘通雅
明者品類亦多有赤白二色與稷大同小異
月收者曰 赤種 稻也 字典紅
菊花粘

此の赤白二種河りといつども俗通して赤米赤物と

つりと米十ハ九ハ赤きとの河りといつども俗通して赤米赤物と

花飯言飯紅潤之色 赤白せ子望脆て味為淡く早く饑を

蓋亦赤米飯あり 赤白せ子望脆て味為淡く早く饑を

としふのとのむしより西州の涇潭池の田ようく

る所ふしと地邦ハ稀少なり農政全書云稷之小者謂之

之私其粒細長而白味甘而香九月而熟是謂稻之上品曰

箭子其粒大而芒紅皮赤五月而種九月而熟謂之紅蓮其

粒尖色紅而性硬四月而種七月而熟曰金城稻是高仰之

所種松江謂之赤米乃穀之下品湖州錄云師姑杭言其無

芒也四明謂之矮白其粒赤而稔白此等陸稻とんえ

とり且農政全書ハ所謂粒細長而白味甘而香とんえ又

の時其^{ハシチン} 堅^イ 質^ク しく^ク 納^ル あり
今俗に唐子あり 又舩米
 の種^カ 子^ラ 唐^カ 子^ラ 赤^カ と^ハ 白^ク し^ク たり^ク たり^ク の^ハ 何^レ も^ハ 存^在 名^カ 伊^登
 知^ス 是^ノ 々^ノ の^ハ 大^冬 米^ヤ 也^{ナリ} 赤^ク と^ハ 白^ク し^ク たり^ク たり^ク 所^ノ 乃^チ 赤^ク 米^ト 混^シ
 て^テ 統^テ 入^ル 唐^米 米^ト し^ク 唐^米 米^ト し^ク 占^城 稻^ト 混^シ 濁^ル たり^ク 是^ノ
 の^ハ 播^ザ り^ノ の^ハ 高^キ 米^{ナリ} 大^冬 米^ハ 大^冬 米^ノ 混^シ 字^{ナリ} あり
 南^産 志^引 閩^中 記^云 秋^種 冬^熟 曰^ク 晚^稻 歲^一 熟^者 曰^ク 大^冬 本
 州^時 珍^云 秬^似 稷^而 粒^少 始^自 閩^人 得^種 於^占 城^國 其^熟 最
 早^六 七^月 可^收 今^此 方^一 舩^米 米^{ナリ} 是^ノ の^ハ 大^冬 米^一
 二^種 米^ト 是^レ 是^レ 藏^葉 米^ト 播^キ 閩^種 米^ト 獲^得 又^一 種^唐
 米^ト 是^レ 是^レ 葉^米 米^ト 播^キ 長^大 米^ト 是^レ 是^レ 葉^米 米^ト

凡て野稻は緑米なり

此^ノ の^ハ 水^陸 二^種 あり
陸稲ハ 又^一 種^米 一^類 不^レ して^米

赤^ク 米^ト の^ハ 紅^玉 米^ト 云^フ 其^ノ 莖^葉 並^ニ 常^稲 米^ト 彷彿^ス あり^但 生^キ

芒^穎 極^テ 赤^ク 耳^ト 按和名鈔引廣志赤穰稻多々其ノ或昂

米稻蟬鳴稻字の 赤^ク 穰^稲 赤^ク 米^ト 云^フ 其^ノ 白^米 稻^ト 對^シ 農^人 其^ノ

苗^ト 見^ル 知^ル 其^ノ 葉^ト 葉^ト 細^ク 短^シ

最^モ 柔^軟 少^シ して^米 粒^小 く^出 多^シ ハ^芒 多^シ 偶^々 有^ル 是^ノ

の^ハ 粒^小 軟^ク あり^又 赤^白 兩^種 有^リ 是^ノ 白^米 米^ト 多^ク 芒^多

粒^米 米^ト 白^シ 或^ハ 粒^米 淡^紅 米^ト 是^レ 米^ノ 白^キ 何^レ

耳^并 子^之 白^米 米^ト 云^フ 凡^ク 乾^磨 磨^キ 之^ノ 實^カ 何^レ 乾^キ

磨らハ穀とお落せしき磨りたるあり蒸磨ハ穀と俵
 子裏水よ漬し瓶して蒸て稗と去りしるよそ其製造の
 ちぐらみく其性味別桑大よ交まり○此もハ早中晩及
 糯の種族あり三月中苗代よ蒔つくも也率其種穡の時
 節ハ常稲よ異あり○此もハ稗稲よありしかくざ
 俵瘠土乃停田ありと植るよめされハ四月の後前よ浸
 種十よハみまてハ苗代をかくと昂よ交播して稍白芽
 と出と蒔つくるあり其耕て蒔いるの法ハ常とおれ
 しく既に種撒ふんともる蒔ゆきよりその田土と干
 乾し浮土よ肥或ハ馬糞と晒しいと細やうにかき碎き

粉のこくとして白沙よ種子と採もせりこし麦粟う
 るよいとし○凡田一畝よハ種子一升の積めして畚の
 ぶき器よ入て三指一撮ふして六寸皆許よ撮つて俵
 あり又長手の府袋よ盛て双のよとこく種と撮り三
 尺ちどもおさまに投撒よすりよ概疏の差さく基の枿
 の整るるおしく蒔附るありその敏あるともよまはる塊
 せつらして擲棄るよし是之農夫の熱のわざあり○
 早稲ハ毛實とつるもの完よし三月中に蒔附七月初よ
 刈阿ぐるなり世ふく稗米共中袖一名赤やばしよとい
 そつら蓋大冬の訛あるは是洋米の種あり又横川白

糴



稻孫

比通知稻 和名鈔云時和孫也尾張

比古波衣 新撰字鏡按比古ハ曾孫と比古古と

訓古古言梯細枝ありこは和名鈔ハ前漢天文志註

中謂桑榆孽生為葆禾野生曰旅さハ字鏡ハ穀再生

比古波衣と訓や和名鈔ハ木藪亦訓と地れしうそ

古河と大なる蓬々けはまぐさの去平の於

曾於比稻 和字 引手 蓋比通知の持あり或云引ハ比古

引手の訛ありし 蓋 冷毛 御常ありの地冬と樹蔭

政全書云鳥口稲色黒而能水与寒又謂之冷水結稻之

品とん 梁 日次紀獲稻後再生 又生 沖繩方言昂復生

成形成圖說卷之十六

四十一

稻孫廣雅稻已割而復抽曰稻孫○
再熟稻唐書開元十

再熟稻四民月令養生要集等亦同
再熟稻農政全書其已刈而根復發苗

其粒與常稻無異
再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再
熟再熟稻謂之再熟稻亦謂之再

於呂加於比稻和名鈔。

野立生稻

籼亦作稻菴和名鈔引唐韻自生稻也。○秘音棹集韻禾籼
生也。○秘音說文稻今落來年自生謂之秘。○後漢
光武紀嘉穀作嘉旅生注寄也。不因播種而生唐書馬燧傳
大曆四年兵亂後大旱田中生籼禾人頗便之注籼禾再
也。唐書開元十九年揚州奏籼生稻二百一十五頃再熟稻
一十八百頃。○此自生稻孫。野稻吳志嘉禾三年由
為禾興縣。○唐地理志滄州本魯城乾符元
年生野稻水穀十餘頃。黃魏創民就食之。
○通雅揚州生籼稻自生稻也。
從字彙補今年稻來年自生也。

蕃名 ウイルデレイスト

おろかおろか即自生也凡播種と云くして野生と云

この草多々茅苳カヤスギありて籼穂と考ふるはあり本藩露

島嶽の自然籼と云々スギハ苳カヤスギより輒チカゴロ近安永八年十月

朔日大隅郡檜島炎上して海中ニ五の新嶼ニヒミと涌出する

始檜島絶頂の東南兩面と移り峽あり爰に湖あり白
他と云々を白し同一所峽を移り湖ありと云々
遊遊大々を熱するは是檜島童謡に曰二あひうう雨流
以雨ハ流さるる沙流は火の子乃まふ焼きむの云々
果して朔日味新雨間より火を為せり前日地震あり
方教叶里又當の己午の刻島中の井患淋瀝所々選
出又海水葉を子變は是火變乃徴也凡山上火と告げ
朔望の交より蓋海流の候も修る今事より因て
以於是檜島及比隣の地沙反降積て堆ツツキおと七尺許田畝
川谷悉く埋没し白沙渺々カヤスギ是耳時に白沙原頭カヤスギ茅苳
自生し其末子各稲實と結カヤスギ比類と壘又新嶼カヤスギ其上も播

種と偽ど松の稚生茅比嫩苗叢茂て茅稜と云米粒と
 着て土民採食するもさう皆曰天道人を殺さんと蓋様島
 火変新鴻涌出ると云々の續紀所載神護中大隅海中神造
 の島及同紀天平寶字八年鹿島信介村の前は化成三島
 也しより此のころ僅に三度よこると今復新嶼と涌出と
 るは混沌再い來り俱津自生うぶとし故に其勢氣葱艸
 化して米稻と茂り竹変變して米粒と結ぶもさうさ
 や竹変米粒と云次霧島嶽淡土の時より後又肥前國
 人より傳はりし客歲肥の雲仙嶽より火發て於
 新嶼中二里許に新島ありて其嶼ありて中は松あり
 雜樹叢生ふるも出づるも一嶼ありて松樹ハるるを躑
 躑持より多かりぬ茅草の生植ふか島の邊がせし
 不剛わがやととおろかしとみ知りぬ實にやはしき

のいみじいと云は例嘗て其自生稻の種子と云て命
 よおりの合せたりと云し嘗て其自生稻の種子と云て命
 して試に植むるも米と云は出づるも植むるも葱とし
 て稲としそは同のつらけやあきつてはハ語る
 らんさうハ上者自生稻と云ふものと云は固て葱とい
 ぬるも一按に續紀和銅六年正月左京職獻稗化為木一
 莖淵鑑類函江表傳孫亮五年父趾稗草化為稻大日
 本史引畧記曰延長五年四月北山野穀旅生人競採之

成形圖說卷之十六終

水之曰者... 山裡... 大日... 皇



